校長室の窓から

聴則観其所行・・・入学式で話したこと

（聴かばすなはち、その行うところを観る。）

新入生と最初の出会いとなる大切な入学式。どんなお話をしようか・・・そういえば、恩師のＩ先生はこんなことを・・・

『中学生に求めることは変わらない。だから入学式は同じ話。考えが定まらないから、ころころ話が変わるんだ。』

―― 先生、久村は未だいろんなことが定まりません―― ということで、Ｉ先生から吐き気がするほど鍛えられた（いや「薫陶を受けた」の間違い）漢籍から、こんなお話をしたわけです。

（抄 読みやすくするため一部書き直しました 前略）

「聴かばすなわち、その行うところを観る。」この言葉は、今から2500年以上前の紀元前239年に、秦という国でつくられた書物、『呂覧（りょらん）』（呂氏春秋）に書かれています。今の言葉に訳すと、

（話を）聞いたら、それを行う様子を観る。

となります。そして、この言葉は、何を見るかによって二つの解釈をすることができます。

一つ目は、話している相手を観る。そこから、『話している人物を評価する。』という解釈。もう少しわかりやすく言うと、立派なことを言っている人がいたら、言っている人自身がそれを実行しているかどうかを観察して、実行していれば優れた人、言うだけで実行していなければ、さほどでもない人だということわかる、という意味です。

この解釈は、古くから、人の見極め方を教える箴言として伝えられてきました。しかし、それだけではなく、自分自身に対して、『偉そうに言うだけじゃなくて、行動が伴う人間になりなさい。』という戒めを含んでいる言葉です。

二つ目が、聞いている自分を観る。そこから、『自分を振り返る』という解釈です。新入生のみなさんに伝えたいのは、この二番目の解釈です。この解釈では、「お話を聞いたら、その聞いたことを、行動に移しているかどうか、自分を振り返りなさい。」となります。それをもっと簡単に言うと、

話を聞いたら、それを行動に変えなさい。

それが聞くということです。

となります。

よく私たちは、「聞いて理解しなさい。」とか、「聞いて覚えなさい。」と言います。それはそれで正しいと思いますが、達人の「聞く」は、『聞いたことを行動につなげる。』という聞き方だと教えているのです。

確かに、どんなに素晴らしいお話を聞いて感動しても、それが自分の行動に何の影響も与えていないのであれば、ほとんど意味がないでしょう。

私たちは、自分自身の行動に、よりよい変化があることを人間的な成長とか人格の陶冶（とうや）などと言います。ですから、行動につなげる聴き方は、まさに「成長の方法」だと言えます。

ちょっとしたお話を聞いたとき、「このお話の中で、自分の行動につなげられるものは、何だろうか。」という聞き方をする。もし、皆さんに、そんな聴き方が身についたなら、きっと、成長と幸福が約束されることでしょう。

そして実は、皆さんの上級生は、たくさんの人が、これを実行しています。ぜひ皆さんの目で、彼らが、どんな風に実行しているのかを確かめてください。

『聴かばすなわちその行うところを観る。』

「言ったことを実行しているかどうか、人を見極め、自分を振り返りなさい。」そして、もう一つ。

「聞いたことを行動に移す。それが聞くということ。」

紀元前から大切にされてきた『呂覧』の言葉を、今日、皆さんに授けました。中学校での生活を通して、ぜひ、これを自分のものにしてください。（後略）

・・・ところで、このお話を、Ｉ先生がどんなふうに評されるか、もう聞くことができなくなってしまいました・・・敬愛するＩ先生とのバトル（いや思い出）は、またの機会に。